敦煌写本はなぜ蔵経洞に封蔵されたのか

蔵経洞が封蔵された理由については、「避難説」と「廃棄説」の二説がある。「避難説」はフランスの研究者ペリオが唱えたもので、異教徒から貴重な仏教経典を守るために封蔵されたという説である。ペリオはその原因として、この地が一〇三五年頃、タングート族の西夏の攻撃を受け、その支配下に入ったことを挙げている。井上靖の小説『敦煌』のモチーフにもなった説だが、仏教を信奉していた西夏から仏教経典を守るといえるのはおかしいとして、今日では十一世紀初頭に仏教国・于闐国を滅ぼした、イスラム教国・カラハン朝の脅威を原因と考える研究者が多い。

これに対して、イギリスの探検家スタインが唱えたのが「廃棄説」である。スタインは一九二一年に出版した第二次中央アジア探検（一九〇六～八年）の報告書の中で、蔵経洞は不用となった仏教経典などを納めた「神聖な不用品の貯蔵庫」であるという新しい考えを示した。この説は、敦煌写本『啓顔録』がなぜ蔵経洞に入れられたのかを解く鍵になると思われるので、少し詳しく見てみたい。

（蔵経洞から発見された）*大量の文書の中からは、一〇三四年から三七年の間に敦煌を征服し、その後二百年近くこの地を支配した西夏王朝あるいはタングート王朝の創始者（李元昊）が制定したあの奇妙な文字（西夏文字）はまったく見つかっていない。ところが洞窟の壁画には、

数百字の漢字のほかに、いくつかの西夏文字がチベット文字やモンゴル文字、ウイグル文字とともにズグラツフイートのように漆喰の上に書き刻まれているのが見えた。となると、自然考えられることは、この小さな礼拝堂は、たとえばタングート族などの破壊的な侵攻が原因で封印され、その後、完全に忘れ去られてしまったのではないかということである。ところがこの密封された穴倉からは、もともと寺廟や僧院で神聖なものとして使用され、不用となったあらゆる種類ものを貯蔵する場所として使われていたことを示す証拠も見つかっている。なかでも特筆すべきなのは、明らかに經典の端切れと見られる漢字を記した紙切れを、丁寧に入れて縫い上げた多くの小さな布袋である。中国の人々は、いまでも文字の書かれた紙が床や道に落ちていると、拾って焚き上げの儀式を行う習慣があるが、これらは明らかにそれと同じ俗信から集められたものである。^①

* () 内はいずれも引用者

スタインのいう「文字の書かれた紙が床や道に落ちていると、拾って焚き上げの儀式を行う習慣」とは「敬惜字紙」の習慣を指す。中国では古来、文字の書かれた紙を粗末にすると罰が当たり、逆にこれを大切にすると善報があるという俗信があった。たとえば、南宋の洪邁が著した『夷堅志』には、

① Aurel Stein: *Serindia: Detailed report of explorations in Central Asia and westernmost China*, 5 vols. London & Oxford, Clarendon Press, 1921. vol. 2 Chap. XXII Exploration of a walled-up hoard, p. 820

經典を粗末に扱ったために、悲惨な死をとげた人の話が記されている。①

分寧県の兜率寺に張天覚が著した『円覚経』があった。兵火の後、近くに住む黄という人がそれを手に入れた。寺の僧がこれを返すよう頼んだが、同意しなかった。黄は愚かな人だったので、それが尊いものであるとも知らず、紙が丈夫だったので、バラバラにして寝台の敷物にした。しばらくすると、らい病にかかり、体を腐らせて苦しんだあげく、数年後に死んだ。

これとは対照的に、明の郎瑛が著した『七修類稿』には、「敬惜字紙」の善行により、優秀な息子を授かったという人の話が紹介されている②。

宋の王沂公（王曾）*の父は、文字が書かれた紙が落ちているのを見ると、必ず拾って、香りをつけたお湯で洗い、燃やしていた。ある夜のこと、夢に孔子が現れ、彼の背を叩いてこう言った。「お前は（儒教の）文字が書かれた紙を、なぜそんなに大切にしてくれるのか。お前が高齢で立身出世を望めないのは残念だが、後日、（弟子の）曾参をお前に家に転生させ、一族を繁栄させてやろう。」しばらくすると、夢のお告げのとおり男の子が生まれたので、（曾参にちなんで）

①（宋）洪邁『夷堅志』夷堅支甲卷第六・兜率寺経
②（明）郎瑛『七修類稿』卷四十九奇譚類「王沂公生」

曾と名づけた。するとやはり夢のお告げのとおり科挙に一番で合格した。

* () の中はいずれも引用者

ここに登場する王沂公(王曾)とは、北宋の咸平年間、科挙の三段階の本試験(解試・省試・殿試)にすべて首席で及第し、後に宰相となった人物である。

スタインが中国を訪ねたころ、こうした「敬惜字紙」の習慣は各地で広く行われていた。スタインの報告書と同年に出版された片岡巖の『台湾風俗誌』にも次のような記事が見られる。

本島人は老幼婦女に至るまで一般に文字を尊重する慣習あることは一度び臺灣の地に足を入れば直に知るを得べし、彼の本島到る處の街庄に於て人々が贖金して一區毎に一人の老翁を雇ひ、街巷に落ち散れる文字ある紙の一切即ち新聞紙、名刺乃至廣告紙の破れ紙等、苟も文字あるもの一切を拾つて籠に入れ、廟前又は街端、巷角にある所の「字紙爐」、即ち文字ある紙を焼く爲め設けある小亭狀の紙焼き爐に入れ焼き、其灰の積み溜まるに従て海中に投し、之れにて咸く清め盡したるものとなす風あり、之れ儒教崇拜より來たるものなりと云ふ。

一方、「敬惜字紙」の処分方法は、「火葬」だけではなかった。唐代には、藏経洞と同じように土中に封蔵する「土葬」も行われていた。晩唐の劉蛻は、「破天荒」の故事——「天荒」(文運不毛の地)

と呼ばれた荊州から初めて進士に及第し、「破天荒」と称えられた——で知られる人物だが、彼は唐の大中初年（八四七〜八年）、梓州の兜率寺に十五年の受験勉強の間に溜まった廢紙二七八〇枚を埋め、そこに「文塚」を建立している^①。

こうした「敬惜字紙」の習慣に着目したスタインは、藏経洞から発見された文書の多くが、經典の残卷や反古である理由を「廢棄説」によって説明したのである。なお、スタイン自身は後年、自説を放棄してペリオの説を受け入れたようだが^②、わが国の藤枝晃氏や土肥義和氏、中国の方広鋸氏らはスタインの説を支持している。なかでも方広鋸氏は、敦煌文書の統計的な調査を通じて、この説に有力な根拠を提示している。氏の近年の報告によると、①敦煌文書から発見された仏教經典はわずか四百種弱に過ぎず、当時の標準的な大藏經（唐の智昇『開元釈教録』『現藏入藏目錄』所収一〇七六種）の半数にも満たない。②敦煌文書はほとんどが使い古しの残卷であり、天竿（卷子本の巻首を保護するためにつけられた細い竹や木）と尾軸（卷子本の軸）が揃ったものは、中国国家図書館蔵の一六五七八部の中ではわずか八部、大英図書館蔵の約一四〇〇〇部の中でも三〇部に過ぎない。③敦煌文書は同じ經典の重複が多く、主要な八種の仏教經典の合計が、中国国家図書館所蔵のものでは全体の六

①『全唐文』卷七百八十九、劉蛻「梓州兜率寺文塚銘」

②スタインは一九三三年に出版した *On Ancient Central-Asian Tracks* の中で「ペリオ教授が収集した資料の調査から、この大宝庫の閉鎖は、一一世紀の初頭に行われたものという結論が出された。おそらく、この辺境地域がタンゲート族に征服されて、この聖跡の宗教的諸設備が危険にさらされるようになった時期のことと思われる。」（沢崎順之助訳『中央アジア踏査記』白水社、一九六六年）と述べている。

六・三%、氏がデータ化した世界各地に散在する敦煌文書約六五〇〇〇部の中でも四四・二%を占めているという。さらに氏は、中国国家図書館蔵の敦煌文書の中から「この紙は故経処に安置されたし」と書かれた廃紙（『大般若波羅蜜多經』北敦〇七七一一号）を発見している。氏によれば、この「故経処」とは敦煌の寺院の中にあつた廃紙の保管場所を指すという。^①

鈴木靖 「敦煌写本『啓顔録』について——狂言「附子」の淵源を明らかにした唐代の古写本」

（能楽研究第四〇号、二〇一六年三月）

①方広鋈の近年の研究成果は、一九九〇年に敦煌学国際シンポジウムで発表した論文「敦煌藏経洞封閉原因之我見」に附注として加えたものが『方広鋈敦煌遺書散論』（上海古籍出版社、二〇一〇年）に収録されている。